創立10周年記念誌

波濤

特集号

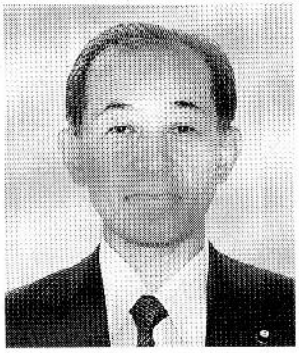
放送大学 神奈川学習センター同窓会

目　次

創立十周年記念誌『波濤』特集号発刊にあたって
会　長　伊東　廣明……3
同窓会創立十周年記念に寄せて
神奈川学習センター所長　新飯田　宏……4
生涯学習をするわけ
神奈川学習センター前所長　浜口　允子……5
放送大学同窓会の使命　本部初代会長　藤田　茂光……5
同窓会創立十周年をさらなる発展の礎に
初代会長　別所　敏明……6
会員の自覚と熱意で発展し続ける同窓会
二代会長　加藤あいし……7
創立十周年記念に寄せて
三代会長　稲葉　恒夫……7
継続は力なり
四代会長　押山　睦生……8
会員の交流拡大を模索して
五代会長　藤井　輝……9
同窓会と鳴滝塾の本質
助教授　坂井　素思……9
土地に刻まれた歴史
助教授　笠原　潔……10
神奈川学習センター同窓会と共に歩んだ十年
助教授　藤井　洋子……11
同窓会創立十周年記念に寄せて
助教授　隈部　正博……11
同窓会創立十周年を祝して
神奈川学習センター事務長　佐々木英俊……12
放送大学での学び
遠藤　俊子……13
人生の転機と放送大学
吉田　昭二……13
「卒論」で目覚めた社会参加
市村　恭子……14
人脈と情報の社会に思う
加藤　登……15
フォスターチャイルド訪問
田澤　誠一……16
十周年記念行事「鎌倉散策」……18
アンテナレポート……21
思い出スナップ……22
同窓会十年の歩み（年表）……24
役員名簿……30
編集後記……31

創立十周年記念誌
『波濤』特集号発刊にあたって

神奈川学習センター同窓会
会長　伊東　廣明



神奈川学習センター同窓会創立十周年を迎えるにあたり、皆様の協力を得て『波濤』特集号を発刊することが出来ました。

顧みますと、放送大学の第一回卒業式の直後から同窓会設立準備にご尽力された諸先輩方のご苦労が実り今日の会員七五〇名余の同窓会に発展しました。これは同窓会の目的とする『会員の親睦と、情報交換及び相互研鑽並びに社会への貢献、放送大学の発展に寄与すること』を達成するために諸活動を実施してこられた歴代の同窓会会長をはじめ役員の方々のご努力と会員の皆様のご協力の賜物であると思います。

同窓会報『波濤』の名には、「繰り返し繰り返し打ち寄せるさざ波もうねりとなり大きな波になって打ち寄せる。さざ波のような小さな同窓会活動でも繰り返し活動して波濤のように大きくしよう。そして、波濤は世界の港、横浜とも縁がある。海は世界につらなり、開かれている。『波濤』で社会に、そして世界に開かれた教育を目指そう。」と言う願いが込められています。神奈川学習センター同窓会が社会への貢献として地道に進めてきましたフォスター・プランへの協力も、フォスターチャイルドと交流を深め現地訪問するまでに発展してきました。この活動は、更に大きな活動に発展するものと思われます。

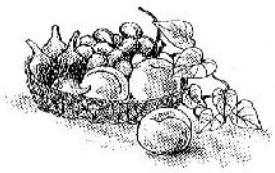
放送大学の特色は、あらゆる年代の方、社会的経験豊富な方々が共に学んでいる開かれた大学です。放送大学の全国化が進み、同窓会連合会の規模も大きく発展してきました。更に通信制大学院の設置が本格化します。生涯学習の環境は更に充実・発展することと思われます。

現在多くの会員の方が卒業後再入学して学習を続けておられます。このことから今後同窓会と在学生がもっと密接に交流の場を持つ必要があると思います。現に行事に参加する在学生の方もあり喜ばしいことで更に活発になることを期待します。

会報『波濤』で放送大学への入学を呼びかけていますが生涯学習の仲間を増やし、輪を広げて行きましょう。そのためにも会員相互の情報交換、情報発信基地として『波濤』を活用して戴きたいと思います。

今後も同窓会として学習センターと在学生との連携を一層緊密にし、そして充実した生涯学習を実践し、相互研鑽を図ろうではありませんか。

今後ともよろしくご協力をお願い申し上げます。



同窓会創立十周年記念に寄せて

神奈川学習センター
所長　新飯田　宏

同窓会創立十周年おめでとうございます。心からのお祝いを申し上げたいと思います。同窓会を通して、卒業後も母校への帰属感を保ち続けたいと考えておられる方が増加しているということは、大変喜ばしいことです。

大学の同窓会(alumni)は、いうまでもなく大学卒業生の共同体です。同窓会の定款なるものを見たことはありませんが、その役割としては、会員相互の親睦を図ること、および母校の発展を支援することが中心だと思います。しかし、各大学の生い立ち、歴史、性格の相違によって、各時代時代に果たしてきた同窓会の具体的な役割は、大学ごとにかなり多様といえるようです。

例えば、私が卒業した大学は、第二次大戦後の高等教育制度の改革によって出来た新制の国立大学でしたから、半世紀を経た今日でも、大学全体としての同窓会組織を持っていません。新制大学の場合、各学部ごとに全く異なる起源と歴史を持つ独立の高等教育機関が統合されて発足した複合体ですから、どうしてもその前身との連続性の方が強くて、学部単位の同窓会組織にならざるを得ないからです。他方、大学院を過ごした大学は旧制の帝国大学が前身でしたから、「学士会」という帝国大学卒業生全体の組織はありますが、自前の同窓会は持っていません（持つ必要のないほど、国によって、特権的地位を保証されていたからでしょう）。私は、このような二つの同窓会に属しているのですが、明らかに、前者の同窓会は、母校の発展、特に大学院の博士課程の設立などの支援活動で大きな役割を果たしていたと思います。他方、後者の同窓会は一貫して親睦団体としての役割が中心といえるようです。

さて、放送大学の場合、伝統的な大学と異なり、主たる教育の場がon airであるため、在学中でもface to faceの関係は極めて少ないのが特徴です。このためキャンパス・ライフといえば、専攻単位による人間関係よりは、所属センターごとの人間関係が中心とならざるを得ません。したがって、同窓会がセンター単位で創設されるのは極めて自然です。しかも、各年次の卒業生自体が、専攻の面でも、年齢構成の面でも、職業構成の面でも、在学時から一貫して非常に多面的で、まさに一学部からなる放送大学の縮刷版にもなっているのが特徴です。

卒業生が卒業後も、大学との絆を大切に思い、同窓会を通して母校への帰属意識を保持し続けようとするのは、大学時代に受けた教育やキャンパス・ライフが十分魅力的であったか、大学時代の人間関係に満足して卒業したか、ないしその双方で充実感が強く残ったからでしょう。つまり、同窓会組織が強固になるかどうかは、大学における教育が成功したかどうかに依存しているのです。その意味では、教官・学生のモラルが基本であるというべきでしょう。

平成十三年度から、放送大学では、高度教養人を育成する大学院を設置し、生涯学習の可能性を新しい視点から展開しようとしています。同窓会諸兄の輪がますます広がり、伝統的な大学とは異なる新しいタイプのalumniになることを期待しています。

生涯学習をするわけ

神奈川学習センター
前所長　浜口　允子

遠く離れた国の、もはや見ることができない過去の社会を、文献史料をつかって可能なかぎり組み立てようと努め、次第にそれらしき像が見えてきたとき感じる悦びが歴史研究の醍醐味です。そして、そうした歴史像を得るために、最もよく読むものが資料なのですが、それをより深く理解するために、先ず大いにお世話になるのが先人の研究であり、その基礎となる社会科学の枠組みです。

ところが、それらがあまりに立派であったり、年月を経て定説化しておりますと、研究は何よりもそれらを前提とするところから始まるようになりがちです。

かつて私は、中国の土地改革に関心をもち、そのイメージとして、当時農村各地には「地主」という存在が厳然としてあり、人々もその存在を認識していたのだと思っていました。研究史からは、そのように読めたからです。

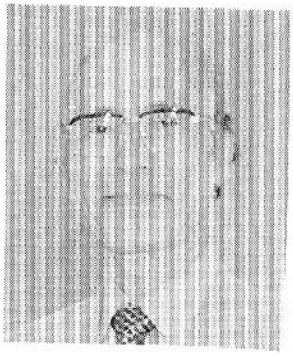
ところが十年ほど前から中国で農村調査を始め、老農たちにくり返しインタビューをするなかで、それは違うのだということに気がつきました。少なくとも、私が訪ねた幾つかの村では、農民たちは土地改革の時点まで、誰も「地主」という存在があることなど知らず、当の「地主」でさえ、自分が地主であることなど全く知らなかったというのです。当時の農民にとっては、「地主」という言葉やその概念は馴染みのないものだったのです。そこで、このような経験から私はもう一度土地改革を見直し、新たな理解を得る視点を得ました。

このことから考えますと「知ること」や「知っていること」は価値あることですが、知っていたために別な考え方をする可能性を捨てていることもあるのだと気がつきます。知るために捨てたものがあったのです。ですから、いま知っていることも、或は違っているかもしれないのであり、そう考えることが次へのエネルギーとなるのです。

そしてこれが、私にとって生涯学習をする理由です。

放送大学同窓会の使命

本部初代会長　藤田　茂光



あれからもう十年もたちましたが、卒業式の日に波打っていた胸の高鳴りが今も続いているように思われます。それは、放送大学で学んでいる時に自己との出

会があって嬉しく思っていましたが、其の上更に皇太子殿下からの御祝辞を戴いていたからです。

私は一人ひとりがしっかりした目的意識をもって学ぶならば、放送大学は必ずこれに応えてくれる素晴らしい大学であることを身をもって体験していました。このことを勉強したいと考えている人々に、是非とも伝えなければならないと心に決めておりました。このようにして同じ志をもった卒業生が集まって同窓会を創りました。それ故に同窓会の目的もこれから学ぼうとする人びとに優しい手を差しのべて上げることに在りました。

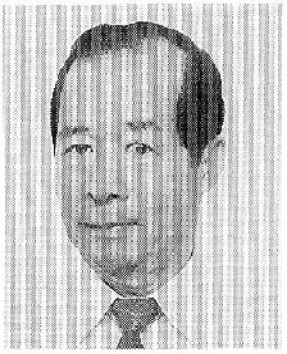
このことを放送大学神奈川学習センター同窓会では、目的として(一)会員相互の親睦(二)生涯学習の実践(三)社会への貢献と定めています。そして具体的活動の一環としてフォスター・プランへの支援を続けていて、現在では五人のフォスターチャイルドの里親になっています。そしてこのことが会員の誇りにもなって多くの方々から沢山の賛助金が送られて来ています。

只今のところ同窓会は諸般の事情から各学習センター毎に分立して独自の活動を行っていますが、放送大学の全国化が進むにつれて、卒業生も何万何十万となり、やがては日本一大きな同窓会組織になっていくに相違ありません。其の時、「放送大学同窓会」として、生涯学習への手助けが出来る統一された力のある会に発展していなければなりません。

神奈川学習センター同窓会がこれからも益々活躍されますよう心から祈念してやみません。

同窓会創立十周年をさらなる発展の礎に

初代会長　別所　敏明



同窓会創立十周年を迎えられ、会員の皆さんが生涯学習仲間の交友の場として同窓会でご活躍なさっておられることは、欣快にたえぬところでございます。また、これまで同窓会運営を支えて下さっている役員の方々に対して、深く敬意を表します。

十周年を振り返ってみますと、神奈川学習センター卒業生が、他のセンターに呼びかけて発足した同窓会の目的の一つに社会に貢献することを掲げました。その具体的事業の在り方を検討したのが昨日のことのようです。そこで神奈川同窓会は、土地柄日本の海の玄関にあやかって、国際化活動に発足当初から取組みました。その結果、ご案内のように、フォスターペアレントとして開発途上国の児童に対して、心の支援と経済的支援を継続して行っております。本年はタイの現地チャイルドを訪問・面会しましたが、実直な人柄に触れ感無量の体験もしました。この活動は地道ではありますが、一つの企画として誤りではなかったことに満足しております。

最後に、同窓会は会員の皆さんが支えているものであります。進んで活動に参加され、同窓会がさらなる発展をされることを祈念しまして、十周年のご挨拶に代えさせていただきます。

会員の自覚と熱意で発展し続ける同窓会

二代会長　加藤　あいし

平成二年十月に設立された神奈川学習センター同窓会が、記念すべき十周年を迎え、益々発展を遂げていることは誠にご同慶の至りです。

十年ひと昔、多少の起伏があったにしても時の流れの早さを感じます。その間、役員の方々の献身的なご活躍のもとに会員皆様の温かい励ましがあったことは言うまでもありません。

特に、主要な同窓会活動の一つである国際貢献（フォスター・プラン）については、ご協力・ご支援をたくさん頂いて参りました。今年は、タイ国のフォスターチャイルド（ソムチャイ君）を現地訪問することができました。このきっかけは、フォスター・プランにご寄付下さった会員の方のご提案によるものです。このように会員の方々の貴重なアドバイスが同窓会活動を更に一歩前進させる力になると考えます。また、私がこの職にあったとき、支部連絡協議会が発足し、支部間の親睦を図る目的で年二回ほど輪番制で開催され、各学習センター支部の活動状況の報告や情報交換などを行いました。当時は各支部とも同窓会活動の基盤が確立されつつある時期にあたり、この支部連絡協議会での討議が同窓会活動に反映されることになったと存じます。

年ごとに卒業生も増え、同窓会活動のあり方も改善されながら、その存在意義が認められ充実したものになって行くものと存じます。そして、この十周年が今後の更なる飛躍と発展の一里塚となることを念じております。

創立十周年記念に寄せて

三代会長　稲葉　恒夫

人は皆母校を愛しその発展を望む心を持っている。神奈川学習センター同窓会としても、その活動の内で会員相互の親睦を図る事はもちろん、母校発展の為各種事業を通して放送大学の存在を強くアピールして行くと共に、この大学の果たすべき役割の一端を担うべきであると考える。

私が卒業した平成二年当時は、放送大学を「大学」として理解し認識している人はあまりおらず「ＮＨＫ学園」などと間違えられたりしていた。しかし現在では、テレビやラジオの放送を利用して勉強する通常の大学であると周知され理解されてきている。

一般に大学の評価基準は、入学試験時における受験生の偏差値の高さで定められている様であるが、放送大学には入学試験がないので、唯、卒業生が社会で如何なる活動をしているか、社会貢

献にどの様に寄与しているかが判断基準となる。その様な意味からも、神奈川学習センター同窓会の活躍は高く評価されてしかるべきである。

神奈川学習センター同窓会規約で役員の任期は、一期二年で三期六年迄と定めてあり、四年前に同窓会設立当初から活動されておられた方々が満期退任するに当たり、神奈川学習センター同窓会の歴史を記録保存して次代に伝えるべく、『波濤六周年記念特集号』が発行された。そしてこの度神奈川学習センター同窓会設立十周年の節目に当たり、記念特集号の発行は時を得た意義ある行事と思われる。

今放送大学は全国に学習センターを設立し、更なる発展が予想される時、神奈川学習センター同窓会も、尚一層の活躍を期待したい。

継続は力なり

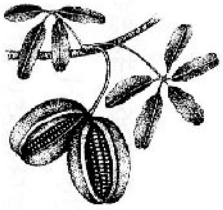
四代会長　押山　睦生

放送大学神奈川学習センター同窓会が十年を迎え、真に慶びにたえません。発足当時の諸先輩の筆舌に尽くし難い御苦労や、これまでの会員の皆様の御協力が有ったればこそと思います。

三、四年前の私の頃は丁度、大学の全国化が始まろうとしていた時でした。それに伴い同窓会も連合体組織となり、各地区の同窓会が独自に活動していくよう改められました。運営していく上で、いろいろ難しい問題が山積するなか、皆様の英知でこうして十周年を迎えられ、一会員として深く感謝したいと思います。

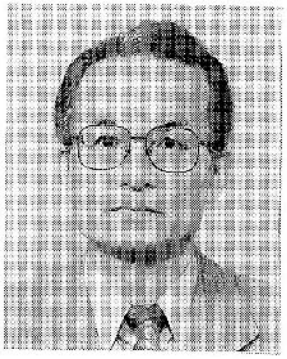
ところで、最近若い人の間に聞き慣れない言い方が流行っています。例えば、「継続は力なりと言うじゃあないですか？」と言う言い方です。この言い方を聞く度に私の心は乱れて、苛々してきます。「～ですよね？」と率直な言い方をされればこちらも、「そうかもしれないな」と思うけれど、「～じゃないですか？」と言う言い方をされると、押し付けがましいようにも、又、さも自分が言う事に自信がないようにも聞こえるからです。どうしてこのような言い方をするのか、良く解らないのですが、こういう感じ方をするのは私一人だけでしょうか？　もしそうなら、私は既に化石と言われる年代の人間になってしまっているのかもしれません。

いずれにしても、「継続は力なり」と言う事だけは間違いないと思います。神奈川学習センター同窓会が、これからもずっと継続していく事を心から祈念して止みません。



会員の交流拡大を模索して

五代会長　藤井　輝



今年五月の総会で、私は二年間の会長役を終え退任致しました。引き続き連合会の監事と神奈川の監事を兼務することになり、現役の立場で一言述べさせて頂きます。

私の関わった平成八年からの四年間で一番力を入れてきましたのは、「会員の交流拡大」と「学習センター教職員との交流促進」でした。今ではセンター教職員の皆さんとは、講演会や『波濤』への執筆などで交流を深めていることはご承知のことと思います。

そして会員の交流拡大には「魅力ある同窓会の構築」を看板に、諸行事への参加を呼びかけてきました。

おりしも、二年前の平成十年、同窓会の改編があって、各地区同窓会が独立し、各同窓会の会長を理事として構成された連合会も設立されました。ここで強調したいのは、会員の交流拡大には連合会の存在が大きく、会員交流の範囲は近隣の同窓会にも及びます。これに関する情報は、『波濤』の中で「連合会だより」として紹介しています。

連合会とは、大学と同窓会の窓口であると同時に、情報を共有化する組織で、インターネット通信も盛んになってきています。

今年は各地で十周年記念行事が開催され、神奈川は恒例の「鎌倉散策」を計画したところ、五十名近い参加者があり、他同窓会からも多数の参加がありました。これからは、このような形での交流が多くなると思われます。

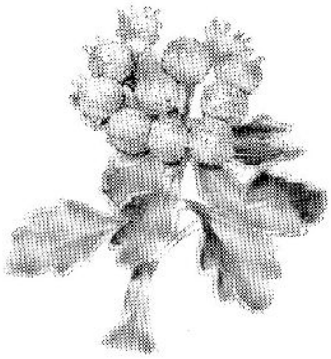
今年は二〇〇〇年、二十一世紀に向けて、会員皆さんのますますのご活躍を祈念致します。

同窓会と鳴滝塾の本質

助教授　坂井　素思

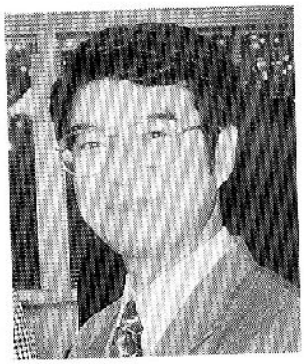
「鳴滝塾」を写した一葉の写真が残されている。生垣に囲まれて、白壁の二階建てと、その手前に平屋の書斎が見える。どこにでもあるような田舎の静かな佇まいである。狭隘な谷間に在ることからして、いかにも辺境である。この写真からは、にわかに何かの中心地を想像することはできない。でもここでやはり問いたいのは、なぜこの長崎の辺境に、しかも江戸時代という交通の不便なときに、全国から食料・産物持参で人びとが続々と集まってきたのか、という疑問である。鳴滝塾は、ドイツ人医師シーボルトが十九世紀前半に長崎のオランダ出島に着任し、当時蘭学を学びに来ていた人びとを、長崎郊外に

集めて開いた私塾である。だから、この圧倒的な蘭学の知識を求めて、彼らが集まったことは想像に難くない。けれども、この時のシーボルトの日本滞在は、たった六年間である。歴史に照らせばほんの一瞬にすぎないが、この後に鳴滝塾の名が全国を馳せることになったのはなぜなのか？　塾生が優秀であったから、日本研究の端緒が開かれたから、シーボルトの指導法が特別であったからなど、いくつかの理由が見つかる。この中で、私が注目するのは、塾生たちが日本全国から来ていた事実である。彼らが出身地に帰ってから、それぞれの領分でかの地の成果を発揮したのではないかと想像する。鳴滝塾の本質は、この「帰ってから発揮された」ところにあるとも言える。このたび、同窓会創立十周年を迎えることは、まことに目出度い限りである。皆さんが放送大学に在籍したのは、鳴滝塾の塾生同様、人生の中のほんの一瞬にすぎない。さてそれでは、同窓生自身が「鳴滝塾」から帰ってからどうなったのか。現在でもそれぞれの領分でそれぞれの力を発揮しているであろうことを心底願っている。



土地に刻まれた歴史

助教授　笠原　潔



現在、神奈川学習センターがあるのは、かっての横浜国立大学工学部の敷地、さらに溯ると、その前身である横浜高等工業学校があった場所である。日本で最初の国産ヘリコプターが飛んだのは、この地であったという。第二次世界大戦末期に開発されたこのヘリコプターは、横浜工高のグランドで初飛行した。数十センチ浮かび上がり、しばらく飛んだ後、墜落・大破し、結局、「幻の秘密兵器」に終わったという。その現場がどこであるかは知らないが、神奈川学習センターの裏手にある横浜国立大学付属養護学校のグランドあたりではなかったか、と想像している。

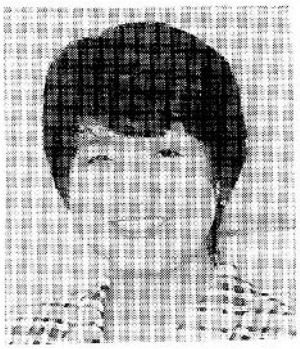
横浜工高の講堂には、ベヒシュタイン社製のグランド・ピアノがあり（大正十四年に購入されたこのピアノは、横浜国大に現存しているという）、そのため、かつては盛んに演奏会が開かれた。フランスの名ピアニスト、ジルマルシェクの演奏会が行われたり、メンデルスゾーンのオラトリオが初演されたりした。講堂は、今、付属養護学校の体育館のある辺りにあった、と聞いたことがある。

どんな場所にも「土地に刻まれた歴史」がある。それを明らか

にしていくうちに、世界が見えてくる。同窓会の皆様の御力で、神奈川学習センターの敷地に刻まれた歴史を解明していただけないものか。

神奈川学習センター同窓会と共に歩んだ十年

助教授　藤井　洋子



神奈川学習センター同窓会の創立十周年を心よりお祝い申し上げます。

神奈川学習センター同窓会が設立され、第一回総会が平成二年十月二十日に開催されました。私が、放送大学に着任したのが平成元年四月一日ですから、同窓会が歩んだ日々と私が放送大学と共に歩んだ日々はほぼ等しいと言うことになります。

当時私はアメリカ留学から帰国したばかりで、慣れない放送大学で戸惑うことも多い日々を送っていました。そのような中で迎えた最初の大きな行事が、第一回卒業式でした。会場は、放送大学の設立を待ちに待って入学し、一大事業を成し遂げた人々の、成就感あふれる、晴れやかな表情で満ちていました。アメリカの多くの大学のように、「卒業すること」が大変な大学が放送大学であり、そのような大学に着任した喜びの実感を私が最初に味わった時でもありました。

当時の神奈川学習センターは、所長の他に、教員は坂井素思先生と私の二人だけという異例の状態でした。が、現在では所長をはじめ四人の教員が配属され、学生数も増え、関東地域でも規模の大きい学習センターの一つになりました。

全国化を実現し、大学院の設置を間近に控える現在の放送大学において、生涯学習の実践者たる同窓会の皆さんの貢献の大きさは計り知れないものがあります。今後も同窓会のお一人お一人が、放送大学ならびに社会に、大きな影響力のある存在であられることをお願いし、神奈川学習センター同窓会の更なる発展を祈念いたします。

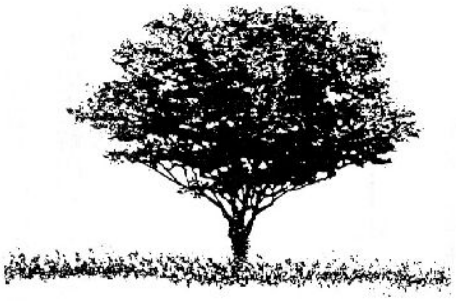
同窓会創立十周年に寄せて

助教授　隈部　正博

神奈川学習センター同窓会創立十周年、誠におめでとうございます。本学習センターの十年間は成長の一途をたどって参りました。入学者数は増加を続け、今まで最も広かった第一講義室での入学式も出来なくなる可能性がでてき

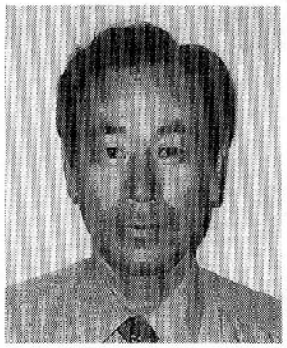
ました。それで、今年は神奈川学習センター自体を増改築し、講義室を増やし、また講義室の仕切りを取り外せば、第一講義室よりもっと多くの人数を収容できる講義室が出来ました。また、図書室と視聴覚室を一緒にして学生さんの便宜を図りました。どうぞ皆様方も卒業生として、一度遊びに来て、見てみてください。今なら（五月現在）まだ新築の香り（？）がします。

これから神奈川学習センターが発展していくうえで、皆様方に大きく頼る部分があります。それは、この放送大学を卒業された皆様方の地域社会でのご活躍があります。それによって放送大学が社会的に広く知れ渡り、その結果として、放送大学への入学者がさらに増えていき、大学全体が成長していくと思われます。そうすれば、神奈川学習センターでの入学式も、この新しい広い講義室で盛大にすることが出来ます。また平成十四年度からは、大学院の開校も決まりました。皆様方も放送大学に再入学し、新しい学生生活をこの新しい神奈川学習センターで送ったらいかがでしょうか。



同窓会創立十周年を祝して

神奈川学習センター
事務長　佐々木　英俊



神奈川学習センター同窓会結成十周年おめでとうございます。

私は、この四月の人事異動により、横浜国立大学から着任いたしました。神奈川学習センターは、横浜国立大学工学部の跡地に建設されました。私が横浜国立大学に採用され、最初に勤務した場所でもあり、懐かしく感慨深いものがあります。

着任早々、前年度からの増築及び改修工事に追われ、記念式典等一連の仕事が無事終了したのは五月下旬となりました。増築前までは、単位認定試験を他機関の施設を借用し実施していたとのこと、これからは自前の施設で実施できることとなりました。又、本センターは交通至便であり、施設は開放的で前任地の大学より充実しており、勉学環境に恵まれていると思います。

通常の大学の学生は偏差値で大学を選びエスカレーター式に入学し卒業していきます。生涯学習・生涯教育が叫ばれている中、放送大学の学生は、社会人となってから、目標を持って入学されてきます。これが本来の大学の姿なのではないでしょうか。私も夜学に十年間通った体験では、一番は忍耐力ではないでしょうか、みなさんも誘惑に負けずがんばってください。

放送大学での学び

遠藤　俊子（6・3卒）

高校卒業以降、看護の専門学校で三年間、助産の専門学校で一年間学んだ後、臨床で助産婦・看護婦として勤務し、更に看護教員養成課程一年、研究課程二年と文部省の一条校ではないが、実に七年間の専門職業教育を受けていました。学士称号すらないのは何か変と思いながら、制度だから仕方ないかと思っていました。

そんな矢先、近場に働きながら学べる大学が開校した。また、その頃、全国的に看護の専門学校が短大や大学へ移行化することが進み、看護の専門教育は受けたけど、大学は卒業した方が良いだろうという思いで入学しました。

しかし、学ぶことの楽しさを味わっている多くの学友との触れ合いは、今まで目的ばかりの学び方しか知らない自分に刺激を与えてくれました。人生を豊かにする学びとはこんなことかと。それを最も感じさせられたのが、星ゼミの卒業研究であったのは言うまでもありません。他の学生の発想や取り組みには感心させられながらも、相変わらず目的志向の学び方しかできなかったが、研究のプロセスは楽しかった。

そして、卒業後北里大学大学院を修了し、平成十年に開学した山梨県立看護大学看護学部で教鞭を執っています。放送大学で学ぶことで大きな転機を得たと思っています。ひとつは、大学院進学の道しるべとなったことであります。もう一つは、人生を豊にする学び方を知ったことでありました。年齢が異なり、普段の生活が全く異なる学友との学習体験は財産であります。大学の自由化が急速に進んできている今、一歩先をいった大学で学べたことは、自分が大学人になった今日大きな力となっています。

（山梨県立看護大学教授　現山梨同窓会所属）

人生の転機と放送大学

吉田　昭二（7・3卒）

私にとって放送大学入学は還暦を過ぎて訪れた四回目の人生の転機であったのです。

小学校入学以来の約六十五年間を振り返ってみると私にとって人生の転機といえる時期が四回ありました。一回目の終戦時で海軍兵学校から復員し旧制高校の編入試験を受験したとき、二回目は大学受験で東京に出るか大阪に残るか迷った時、三回目は葡萄膜炎で左眼の摘出手術をし両眼失明の恐怖に怯えた時期（S49）でした。平成元年四月に選科生として入学、平成三年四月

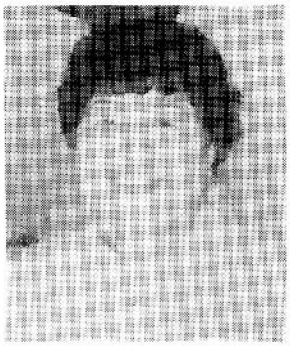
「人間の探求」専攻の全科生（三年次）に編入平成七年三月卒業、以降再入学で「社会と経済」「自然の理解」を卒業、現在「産業と技術」専攻で更に六専攻の卒業或いは大学院を目標に頑張っています。

集団活動の多かった三十五年のサラリーマン生活の反動からか入学当初は自分一人の殻に閉じ籠り勝ちで唯我独尊的だったと思いますが神奈川放友会に入ってからはグループ活動に積極的に参加するように努め現在会長をやっています。

十一年間の学習結果二七〇単位を習得しており、再試験を繰り返し四～六回目にやっと合格した科目もあれば、いきなりⒶの科目もあります。単位取得状況一覧を眺めるとⒶＡＢＣがバランス良く並んでおり更に一覧には記載されていないＤＥの科目にも思いを馳せて我ながらよくやったものだと感心しています。

「卒論」で目覚めた社会参加

市村　恭子（2・3卒）



放送大学は、専業主婦だった私の人生を大きく変えた。とは言っても、入学時に特に目的があった訳でもなく、唯一、私の入れる大学だったからである。卒論以外の単位も取得し、第一回卒業生になれるかな、と思っていた矢先に、四国に住む義父が倒れた。介護に行き来するため卒業を一年延ばすことにした。この一年が、その後の私の生き方を変えたのである。卒論のテーマは、「老人のノーマライゼイションと在宅福祉」とした。そして地域の「介護者の会」に参加し、また、ボランティアとしてお年寄りの家庭にも入らせていただいた。そこには、疲れきった介護者の姿があり、一方、この人達を支えるシステムや施設も十分ではなかった。このような在宅福祉の現状を知り、これを研究課題に卒論を完成し、平成元年度に第二回卒業生となることができた。

福祉の大切さを認識した私は、卒業後に神奈川県の講習で介護実技を修得、同時期に自動車運転免許も取得した。そして、その時を見計らったかのように、運転して行ける距離に、研究テーマだった「在宅介護」を支える施設がオープンしたのは幸いだった。この「病院」と「在宅」の中間施設である「老人保健施設」に出向き、勇気を出して面接をうけた。そして当時、放送大学の学生だった総婦長に、採用されたのである。

ここではデイケアの介護を担当し、三年後に介護福祉士の国家試験に挑戦、昨年は介護支援専門員（ケアマネジャー）の資格を取得し、今年四月から発足した「介護保険」で、現在はケアプラン作成や訪問調査に追われる毎日である。

三十年以上も専業主婦だった私の目を社会参加に向けさせたのは、まさに「卒業特論」であった。そのテーマを与えてくれた義父の十三回忌を来年迎える。

人脈と情報の社会に思う

加藤　登（7・3卒）

放送大学神奈川学習センター同窓会創立十周年おめでとうございます。

さて、十周年記念誌発刊にあたり僭越ですが、表題の片鱗を記させて頂きます。

定年退職後、私は再び教育職を得て満足でした。しかしこの道も七十歳で終点です。「加齢に拘わらず自分の有り様や生き甲斐を求め続けていける道は・・・」と自問している時、友人から放送大学を紹介され「生活と福祉」学科に思いを馳せて、入学をしました。

卒業を機会に教職を辞して、同志と共に社会福祉促進・生涯学習振興を志す奉仕団体、横浜社会福祉研究所を創設して、今日に至っています。小さな情報は大きく育つ種でした。

最近は高齢者から、心や身体の不安を相談されます。

マスコミによる暮し情報は溢れる程発信されているのですが、情報選択が難しいことや、一方通行である為に対話が欲しいのです。

家庭・地域・学校教育にあっては、青少年非行や教育の崩壊など対処方法を問われます。戦後五十年、自由・権利・個性という情報が表層的に解釈され、放任教育の傾向であることや、日本文化や社会化を忘れた教育であったことなどが基因する問題です。

政府は、日本の教育将来展望や教育基本法など国民と共に論議して改革すべきです。

社会に起きる諸問題は、年々解決が難しいものとなってきました。その対処支援には高度な専門知識が求められています。

幸い放送大学で習得した多くの専門知識は、有機的に活用することによって、転移力の高い専門能力となって働いてくれています。

しかし、新しい情報に関しては、センター図書館や放送授業から学び、体験学習や地域に関する情報学習は、同窓会メンバーの人脈を頼り、助けられ、有難く思っています。

今後も血の通い合う人脈情報網を広げる努力を忘れず、心の発信情報に対しても高感度で受信できるように研鑽に努める所存です。

フォスターチャイルド訪問
～フォスター・プラン（F・P）参画から～

田澤　誠一（5・9卒）

現在、皆様方からの寄付で四人のフォスターチャイルドを支援しています。また、今年度より更に一名支援致します。九一年十二月一日にF・P実行委員会が設立され、現在までに支援したチャイルドは、七名に及び五ヶ国七地域の援助プロジェクトに参加しています。フォスター・プランは、日本での呼び名で、日本F・P協会が設立されたのは、八五年五月。本部はイギリスにあり、三七年国連に公認登録されました。PLAN・INTERNATIONAL（プラン・インターナショナル）が正式名で中南米・アジア・アフリカの四二ヶ国に開発援助プロジェクトを進めているNGOです。

レオニダス君

ソムチャイ君

バロ・バラちゃん

ルーシーちゃん

現在支援している四名は、タイのソムチャイ君（'92・9～）、ケニアのルーシーちゃん（'94・3～）、バングラディシュのバロ・バラちゃん（'94・12～）、エクアドルのレオニダス君（'98・6～）です。過去に支援していた三名は、グアテマラのピラールちゃん（'92・3～'95・6小学校卒業）、グアテマラのラモス君（'95・11月～'96・5援助圏外移住）、グアテマラのエリザンドロ君（'96・12～'97・10援助終了年齢）でした。今年度から支援する一名は、現在日本フォスタープラン協会へ申請中です。

初めてのチャイルド、ピラールちゃんの支援を開始して五年ほど経った'97年には既に四名の支援を行っていました。同窓会としては、F・P協会から既に三回の説明会を開催していましたが、「会員の貴重な寄付が我々の意思の通り、現地プロジェクトに使われているのか。」と言う声も聞こえるようになりました。「では、現地を訪ねてみては。」となり九八年から資料集め、そして初めての訪問なので、比較的行き易さを考慮して、タイがクローズアップされて来ました。九九年三月F・P協会の人を招き、講演会と現地訪問に当たっての説明会を開催。同年九月に波濤を通じて参加者を募る。十二月に文房具類を集め、二〇〇〇年二月十一日にいよいよ現地訪問の日が決まりました。

参加人員六名、全行程全て実費は言うまでもありません。旅程は、二月九日（水）～十三日（日）までの五日間。当日は、霧の為一時間遅れのフライトでバンコクから一時間。タイ北東にあるウドンターニ空港に八時四〇分頃、現地スタッフが迎えに来てくれました。ホテル入り九時三〇分、いよいよソムチャイ君の住む村へ出発。一路西へ一時間半、ソムチャイ君の村を直接支援している現地のサブオフィスに到着。ここで案内のスタッフとソムチ

ソムチャイ君宅前にて

ャイ君の自宅へ。本人は、学校へ行っていると言うことで我々も学校へ。そこで現れたのは、我々が知っている幼いイメージを取り払った、素朴で立派に成長したソムチャイ君でした。感激、感激。お土産の文房具一箱を学校に寄付し、折り鶴の作り方など伝授（作り方を置いてきた）しました。学校全体が支援プロジェクトのようで主に貯水タンク、図書館に力を入れており、全校生徒二一三人、出席率の高さも黒板で示されていました。サッカーのトロフィーが職員室に飾られ、校庭ではセパタクローを皆で楽しみました。また、素朴な売店らしきものがあったのには、驚かされました。食堂、カラフルな低学年の教室、ソムチャイ君の教室等など学校の見学が終わりソムチャイ君の自宅へ。

外国からの来客とあってソムチャイ君の両親は、最高のもてなしで迎えてくれました。多分親戚縁者もソムチャイ君の家に居たと思います。実際は、両親とソムチャイ君と弟の四人家族と報告を受けていたからです。鶏肉のスープ、米、粳米、とそれを付けて食べるたれと、一羽は絞めたであろう手作りの昼食でもてなしてくれました。食事が終わる頃に、足音を立てずにいつの間にか近所の人らしい数人が、私の後ろに居たのには驚かされました。帰りには、枕と布のお土産まで頂き、全員で記念写真を撮りました。

帰りにサブオフィスを見学し、チャイルドへの手紙入れボックス等を見せて貰いました。

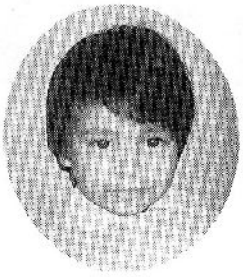
ウドンターニのメインオフィスでその日の感想を皆でまとめ、現地のリーダーへ提出しました。意志が正確に伝わらないといけないので、しっかり日本語で記入しました。そのレポートは、日本のF・P協会へファクスするとのことでした。

ソムチャイ君の支援開始の年に村の支援プロジェクトが始まって、既に七年半が経過して、ソムチャイ君の学校や村が生存に貧しているとは感じられませんでした。このことは、プロジェクトがある意味で成功を修めた結果と受け取れます。世界中まだまだ貧しい国、村が多くあります。これからもF・P協会を通じて支援を続けて行きたいと思います。引き続きご支援ご意見をお願い致します。

（F・P実行委員）

エリザンドロ君

ピラールちゃん



ラモス君

10周年記念……鎌倉散策　H12.6.4

全員集合 鶴岡八幡宮にて

古都鎌倉の散策

群馬　鈴木　喜代

古都鎌倉へのお誘いをいただき有難うございました。鎌倉駅に出迎えて下さった皆様の笑顔から、楽しい散策の予感がし、その通りになった一日でした。

鎌倉は人出と車で賑わい、狭い道を三々五々話ながら、長い行列となって歩きました。緑したたる鎌倉の寺社をご案内いただきまして、荏柄天神、瑞泉寺、報国寺、杉本寺などは初めて詣でましたので特に印象に残っています。

鎌倉駅前の「和民」の懇親会で顔合わせが出来て盛り上がったところを、遠方のため早々に辞去するのは心残りでした。

私は十周年の行事のあちらこちらに参加させていただきましたので、楽しい思い出が入り交じって浮かんで参ります。ご歓待をいただきまして本当にありがとうございました。群馬の山と温泉にも是非お出掛け下さい。

四十年ぶりの鎌倉を訪ねて

千葉同窓会　小河　順

「千葉から意外と近いんだな」そんな印象で鎌倉駅のホームに降りた。

鎌倉を訪れたのは、新潟の会社に入社した頃の職場旅行と、その同僚の結核療養見舞いに来て以来で四十年ぶりである。千葉同窓会からの参加は一人であった。

大仏と八幡宮しか知らない私には、訪れる寺社がそれぞれ印象的で、特に古くからの姿をそのまま残した池や、涼しげな様子の竹林などが心地よく感じられた。歴史を残す寺社と若者が好みそうな小町通りとの、バランスのとれた素敵な街並みである。

皆んなどこに行っているのかな・・・

そば懐石の昼食ではウィットに富んだ自己紹介で盛り上がり、神奈川同窓会の活気が感じられた。散策の途中で、群馬の鈴木さんとは会社関係の共通の知人が多いことを知ることができ交流成果の一つとなった。時間の都合で、最後の駅前での打ち上げに参加できずに帰路に着いたのが心残りであった。

十月には〝市川の歴史と科学の散歩〟が千葉同窓会で催されますので、皆様ご参加頂ければ幸いです。

夏帽子

東京第一同窓会　大町　路人

青嵐いざ鎌倉のニューシューズ
みぎひだり小町通りの夏帽子
親王の非業秘めたる木下闇
古仏寺の石段崩る苔清水
万緑に抱かれて優し鎌倉路
鎌倉の新緑に酔い迷いみち

鎌倉散策に参加して感じたこと

東京第二同窓会　斎藤　成吾

今回はじめて、神奈川同窓会主催の「鎌倉散策」に参加する機会を与えていただいた。神奈川同窓会関係者の皆様に、お礼と感謝を申上げます。

このような行事への参加を通して、今回特に感じましたことは、各同窓会の枠を越えた会員同志が相互交流できることのすばらしさ、そして又、そこに違和感が全くない、ということでした。

どうしてなのだろうかと考えてみますと、それは「同じ放送大学に学び・卒業した」という無意識の共通認識があるからだと言えるのかもしれません。そのことは、五月末に、長崎学習センターを訪問した際にも強く感じたことでした。放送大学が全国化した今、放送大学というご縁を通して、面接授業その他で、地方を旅する機会がある場合には、地方色豊かな各学習センターへの訪問を日程に組入れ、相互交流の機会がつくれる。放送大学校歌にもありますように、「いつでも、どこでも、見えない友と、共に生き、共に学ぶ」、そこに喜びと楽しさがある、それは「本当に素晴らしいこと」だとい

釈迦堂切り通しにて

杉本観音境内にて

えるのではないでしょうか。

今回は、「鎌倉彫刻資料館」に始まり、途中「報国寺」他を通して、最後は「杉本寺」というコースでしたが、私は「鎌倉三十三ケ所」という本を購入。その後いつになるかは、分からないけれど、また、約束は出来ないけれど、第一番目の「杉本寺」を手初めに、第十番目「報国寺」、最後の第三十三番目「円覚寺・仏日庵」と言った寺めぐりを、時間をかけて実現、当時に思いを馳せるのもよいのではないか、と改めて思いました。

また、帰りに「鎌倉駅」近くでの「食事と歓談」も和気あいあいの中に終り、「今日参加して本当によかった」と感謝感激、帰路についたのでした。

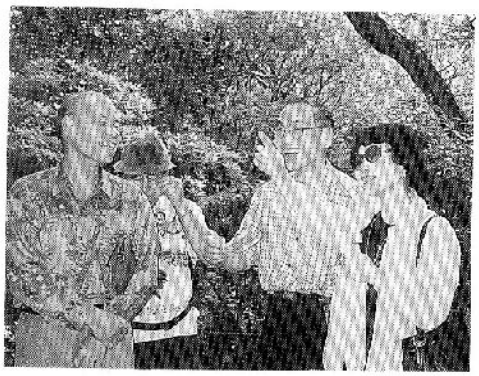
初夏の鎌倉散策を終えて

神奈川同窓会　西浦　久晏

今年は神奈川同窓会発足十周年の佳節にあたり、その記念行事として六月四日に初夏の鎌倉散策を行いました。季節的には花の盛りではありませんでしたが、鶴岡八幡宮を最初に寺院等数カ所を訪ねました。今回は十周年記念行事ということで、他の学習センター同窓会の方々にも呼びかけたところ、十数人の方々に参加いただき総勢四十人を越える盛況となりました。もう少し時間をとって見学したかった等の反省点もありましたが、新たな出会いもあり、和気あいあいのうちに懇親を深めることも出来ました。『古きを尋ねて新しきを知る』そんな感慨を抱いた方もいたことでしょう。

これからもいろいろな出会い…人、自然、文化、芸術、出来事etc…を通じて新鮮な感動を味わいたいと思います。それでは、又皆さんとお会い出来る日を楽しみに…。

（企画担当）



瑞泉寺境内にて

二次会も和気あいあいと・・

史跡めぐり

神奈川同窓会　南　宏

鎌倉の史跡めぐりの呼びかけに
　遥か群馬の学友（とも）らも集う
若葉なす鎌倉宮に詣ずれば
　静寂（しじま）をやぶり鶯の鳴く
報国寺の竹叢しずもり人まばら
　庭園の景歩みとどむる

アンテナレポート

神奈川学習センターの学生は地元にどう受け止められているのでしょう？

弘明寺に神奈川学習センターが出来て十余年、日頃利用していると思われる近隣の商店約十軒の方々が、学習センター・放送大学生に対してどの程度の関心を寄せておられるのか、簡単に伺ってみる事にしましたが、残念ながら期待する程の結果は得られませんでした。その主たる原因の一つは、放送大学生と一般の人との区別がつかないという事にあります。然し乍ら、街が以前より活気づいたと感じている店が半数あった事、又放送大学生が、一生懸命勉強していて素晴らしいという称賛の声、チャンスがあれば入学してみたいと思っている人が約三分の一おられた事等、嬉しい言葉も頂きました。

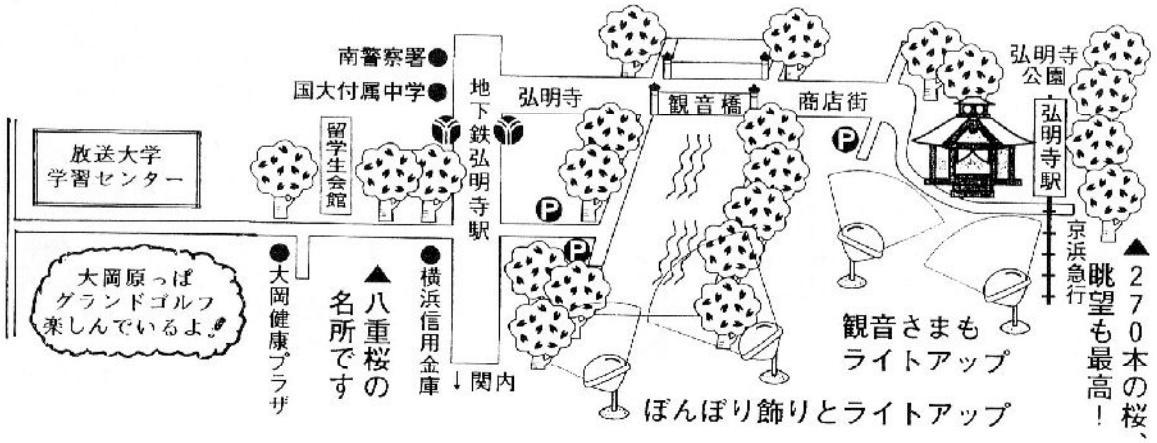
その反面、入学方法、費用等、よく分からないとか、学習センター自体が何をしている所なのかも知らないという声があったのには、非常に残念な思いが致します。

要望の中には、放送大学はこういう勉強をこの様にやっている所であるという宣伝をもっとして欲しいとか、一般の人々も通える短期セミナーを行って欲しいとか、又、この時間の授業には、この品（方眼紙等）を使うという情報を前もって知らせてもらえれば、品切れがおきない様準備しておけるのだが、という文具店からの要請もありました。

放送大学生には、地元のお店の利用度を高めてもらい、学習センターには、地域との交流を深めて欲しいというのが、総体的な意見かと思われます。

学習センターがある事により、地域が活性化したというには、まだ程遠い存在の感を受けましたが、増改築も済み、一段と立派になった神奈川学習センターが、地域に根付き、シンボルとなる様に、我々同窓生も応援していこうではありませんか。

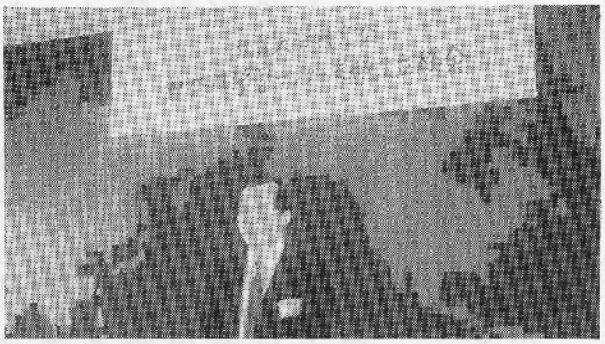
（出口仁美　記）



スナップ〉

センター同窓会の10年間 ――

H2.10 祝賀会 宮崎センター長のご祝辞

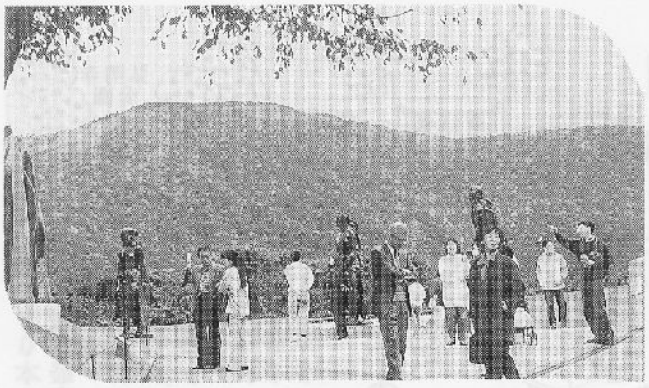


H2.10 神奈川支部設立総会 初代会長 別所氏

ジャンプ!!

H4.1 ニューイヤーパーティー

H5.9 江の島見学会



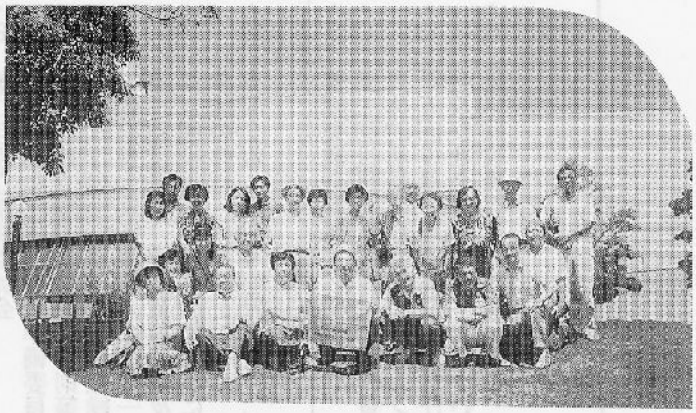
H7.10 箱根彫刻の森見学

H7.4 花の下で・・・日本民家園

〈思いで

―― 写真で見る神奈川学習

H9.4 ハイキング三浦半島 荒崎海岸



H8.7 キリンビール工場見学

H10.5 講演会 放送大学助教授 藤井洋子氏

H10.2 横浜歴史博物館

H11.1 新年会 坂井先生を囲んで

H11.1 相撲部屋入門？

H11.5 講演会 放送大学助教授 笠原　潔氏

H11.10 久里浜コスモス園にて

同窓会十年の歩み（年表）

	1985年（昭和60年）	1989年（平成元年）	1990年（平成2年）	1991年（平成3年）
神奈川学習センター同窓会の歩み			6・30 同窓会神奈川学習センター支部設立準備委員会発足（別所委員長、嶺田・加藤副委員長） 7・8 第二回設立準備委員会 規約・活動・支部総会準備委員会発足 10・7 第六回設立準備委員会　会則等まとめ 10・20 神奈川学習センター支部設立総会開催 11・11 初代会長　別所敏明（会員数一一九名）　懇親会 12・16 第一回役員会　役員業務分担及び役員会運営について 第二回役員会　支部活動施策について及び賀詞交歓会への参加の件 12・19 支部会報『創刊号』発行	1・5 賀詞交歓会参加 2・17 第三回役員会　役員の公的出費の取り扱い・社会貢献への具体的活動及び会報のネーミング募集について 4・13 第五回役員会　本部役員の選任・在学生サークルとの連絡会及び社会貢献のテーマについて 5・12 第六回役員会　本部総会報告、第二回支部総会について
同窓会本部・連合会の歩み		8・27 同窓会設立準備委員会発足 12・1 群馬学習センター　同窓会発足（宮沢会長）	3・11 設立総会を東条会館にて開催　会員210名（藤田会長） 4・26 終身会費10,000円を決定 6・3 記念植樹祭　千葉放送大学本部 埼玉支部設立総会（新井支部会長） 6・22 第一回同窓会本部と放送大学との懇談会 7・1 同窓会誌創刊号発行　タイトルを公募 7・3 「放送大学同窓会に対する要望調査」アンケート実施 9・3 千葉支部設立総会（吉原支部会長） 10・9 同窓会事務局開設（千葉学習センター内） 10・20 神奈川支部設立総会（別所支部会長）	2・11 東京第二支部設立総会（二村代表世話人） 2・16 同窓会会報のタイトルを『公孫樹』と命名 3・24 卒業祝賀・謝恩パーティ主催　幕張メッセ 5・4 第二回総会　虎ノ門パストラル（吉原会長） 11・20 放送大学学園設立十周年記念式典に出席如水会館
放送大学の歩み	4月 香月秀夫学長就任 神奈川学習センター落成　宮代彰一所長就任	4月 甲田和衛学長就任　三学期制から二学期制へ移行 神奈川学習センター　宮崎所長就任 4月 第一回卒業式　国立教育会館 8月 544名卒業 集中面接授業開始 9月 九月卒業生61名　各学習センターで卒業証書授与式	3月 第二回卒業式　国立教育会館 663名卒業 （平成元年九月卒業生を含む） 4月 神奈川学習センター　浜口允子所長就任 9月 放送大学図書館落成式典 10月 「放送大学ビデオ公開講座」開催（共催・帝塚山学院大学）	3月 第三回卒業式幕張メッセ 744名卒業 8月 セミナーハウス開館 11月 放送大学創立十周年記念祝賀会開催如水会館

1991年（平成3年）

6・16　第二回支部総会開催（別所会長・会員数一六〇名）
講演会放送大学講師　仙洞田潤子氏「ゴルバチョフ大統領の来日以降の日ソ関係」　懇親会
7・13　第八回役員会　支部会報のタイトルは『波濤』に決定
7・30　会報『波濤』第二号発行
8・18　見学会　キリンビール横浜工場
12・1　第十回役員会　F・P（フォスター・プラン）実行委員会発足　フォスター・プラン活動の資金確保は、寄付金及び支部会計からの支出等による。男女各一名の援助を当面の目標とする。

1992年（平成4年）

1・12　大学関係者・在学生・卒業生による「'92ニューイヤーパーティー」（第一講義室）
3・10　会報『波濤』第三号発行
3・1　F・P　一人目のフォスターチャイルド　グアテマラのピラールちゃんの援助を開始
5・2　F・P　（財）F・P協会による全国主要新聞掲載の広告に、当支部の活動を紹介
6・14　第三回支部総会開催
役員改選第二代会長　加藤あいし（会員数二二一名）
平成四年度より、フォスター・プランを別会計にする
講演会（財）F・P協会　後藤みどり氏「国際貢献について」
懇親会
6・25～31　大学の窓でフォスター・プラン支援活動について放送
9・1　F・P　タイのソムチャイ君援助開始
9・9　会報『波濤』第四号発行
10・6　見学会　放送大学本部施設
11・1　講演座談会　相模福祉村理事長　赤間一之氏「福祉と行政について」

1993年（平成5年）

2・7　支部連絡協議会準備委員会（東京第二支部主催）出席
2・14　第二十回役員会
2・26　会報『波濤』第五号発行
5・30　第四回支部総会開催（加藤会長・会員数二七九名）
講演会　千葉工業大学　清水義夫先生「思考は柔軟ですか―私の言っていることは嘘である」
懇親会
6・13　第二十三回役員会　支部運営費の件・第一回支部連絡協議会参加について
7・4　第一回支部連絡協議会（東京第一支部主催）出席
8・28　会報『波濤』第六号発行

3・29　卒業祝賀・謝恩パーティ主催　国立教育会館
4・24　第二回同窓会本部と放送大学との懇談会
5・24　第三回総会　国立教育会館　（別所会長）
10・11　比嘉教授講演会開催
会報『公孫樹』第五号発行

3・28　卒業祝賀・謝恩パーティ主催　国立教育会館
5・24　第四回総会　国立教育会館（別所会長）加瀬教授講演会開催
7・4　第一回支部連絡協議会（東京第一支部担当）
11・12　放送大学創立十周年式典・シンポジウム参加
12・23　第二回支部連絡協議会（東京第二支部担当）

3月　第四回卒業式　国立教育会館
4月　708名卒業
小尾信彌学長就任
9月　アサバスカ大学（カナダ）との協力・交流に関する協定を締結

3月　第五回卒業式　国立教育会館
4月　855名卒業
台湾国立空中大学との交流に関する協定を締結
11月　放送大学十周年記念式典
記念シンポジウム　祝賀会
イイノホール

	1996年（平成8年）	1997年（平成9年）
10・22 見学会　箱根彫刻の森美術館 10・29 「浜口先生を囲み組織について考える会」（本部主催）出席 11・1 F・P　グアテマラのラモス君援助開始 11・19 F・P　F・P活動についての勉強会 講師　F・P協会　丸山和子氏 11・26 第三十九回役員会　記念誌発行委員会報告	3・1 『波涛』11号発行 3・24 見学会　第一回鎌倉散策 5・1 F・P　グアテマラのラモス君援助圏外へ移住の為援助終了 5・30 神奈川学習センター支部創立六周年記念誌『波涛特集号』発行 6・30 第七回支部総会開催　役員改選　第四代会長　押山睦生（会員数571名） 講演会　同窓会事務局長　五十嵐一成氏「インターネットについて」懇親会 7・28 見学会　キリンビール横浜工場 9・1 会報『波涛』12号発行 F・P　グアテマラのエリザンドロ君援助開始 9・28 九月度卒業生へ同窓会会員のお誘い 10・19 講演会　本部初代会長　藤田茂光氏「自己と出会うまでの長い道」懇親会 10・28 見学会　横浜海上防災基地　神奈川県警本部等 11・17 見学会　第二回鎌倉散策 12・1 F・P　バングラディシュのバロ・バラちゃん援助開始	1・19 臨時役員会　同窓会組織改編に関する神奈川支部の意見を纏める 3・1 会報『波涛』13号発行 3・14 第一回学習センター事務職員との懇談会開催 4・20 ハイキング　三浦半島荒崎海岸 5・25 第八回支部総会開催　（押山会長・会員数332名） 講演会　中島保寿牧師　「心のケアーについて」　懇親会 9・1 会報『波涛』14号発行 9・21 講演会　F・P協会　伊勢崎賢治氏「現地から見たF・P制度」 9・28 九月度卒業生へ同窓会会員のお誘い 10・1 F・P　グアテマラのエリザンドロ君援助年令を過ぎた為終了 10・26 見学会　第三回鎌倉散策
	3・17 卒業祝賀・謝恩パーティ主催　国立教育会館 3・23 諏訪地区学習センター支部設立総会（堀内支部会長） 5・6 第七回総会　文京区シビックホール（須藤会長選出） 7・4 第七回支部連絡協議会（東京第三支部担当） 11・8 第六回同窓会本部と大学との懇談会	2・9 第八回支部連絡協議会（東京第一支部担当） 3・23 卒業祝賀・謝恩パーティ主催　国立教育会館 5・18 第八回総会　国立教育会館　（須藤会長） 6・15 中埜肇教授講演会開催 組織体制改革特別実行委員会編成
	3月 第八回卒業式　国立教育会館 1661名卒業 卒業証書学位記様式変更 7月 単位認定試験期間の短縮	3月 第九回卒業式　国立教育会館 1612名卒業 4月 単位互換協定　大学63校 短期大学44校と締結済み

1998年（平成10年）

1・31　第56回役員会　同窓会組織改編に関する神奈川支部の意見を纏める
2・8　見学会　横浜市歴史博物館
3・1　会報『波涛』第15号発行
3・8　第57回役員会
5・24　第九回総会開催　役員改選　第五代会長　藤井　輝（会員数645名）
同窓会組織改編により各支部が独立、「放送大学神奈川学習センター同窓会」に改名
会則の新設　年会費納入者を会員の条件の一つとする
講演会　放送大学　藤井洋子助教授　「楽しみながら英語を学ぶ方法」　懇親会
6・1　F・P　エクアドルのレオニダス君援助開始　支援対象者四名に増員
6・28　F・P　エルニーニョ災害緊急対策特別援助
7・7　見学会　神奈川県立生命の星・地球博物館
9・1　会報『波涛』16号発行
9・6　第61回役員会　パソコン購入の検討
9・26　九月度卒業式パーティで祝辞　会員募集（入会金5000円・年会費1000円）
10・4　見学会　第四回鎌倉散策
3・22　卒業祝賀・謝恩パーティ主催　国立教育会館
4・19　第九回総会　国立教育会館
同窓会組織改編決定　各支部の独立
本部積立金の各同窓会へ配分決定
現在構成メンバーは九同窓会
放送大学連合会発足（鈴木連合会会長　群馬同窓会）
10・20　同窓会連合会会報『公孫樹』第17号発行
12・4　同窓会連合会と大学との懇談会

1月　通信衛星放送による全国放送開始
3月　第十回卒業式　国立教育会館　1686名卒業
4月　吉川弘之学長就任
ビデオ学習センター及び地域学習センターを学習センターに改組
放送大学卒業生調査実施
10月　全国の学習センターで全科履修生受け入れ開始
二学期より全科履修生入学時の

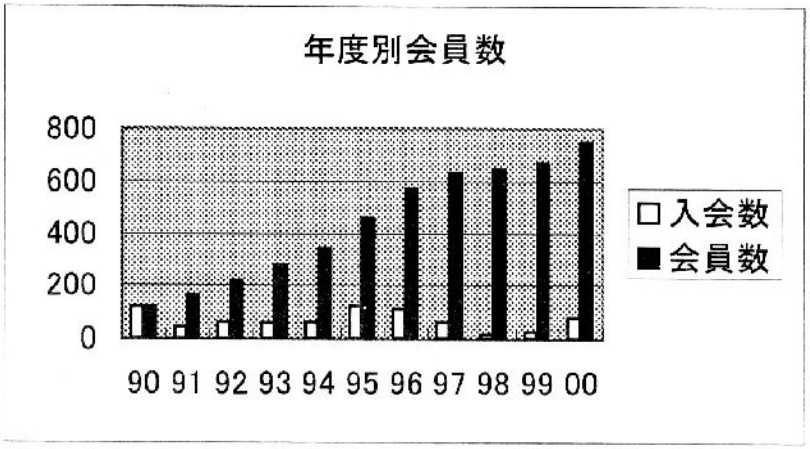
1999年（平成11年）

1・31　見学会　江戸東京博物館等
2・28　第64回役員会　同窓会内規等見直し
3・1　会報『波涛』17号発行
3・14　講演会　F・P協会　松本紀子氏、広本正郁子氏
5・16　第十回総会　（藤井会長・会員数671名）
講演会　放送大学　笠原　潔助教授「洋楽移入の入り口―横浜―」　懇親会
6・20　見学会　横浜動物の森公園
9・1　会報『波涛』18号発行
9・19　第67回役員会　十周年記念誌編集委員会発足
9・25　九月度卒業式パーティで祝辞　会員募集
10・3　見学会　久里浜コスモス園・ビクターVHS記念館
10・9　ダンスサークル発足
10・17　グランドゴルフサークル発足
11・14　第68回役員会　10周年記念行事等の検討
3・21　卒業謝恩・祝賀パーティ主催　国立教育会館
4・17　放送大学同窓会連合会開催　（岩田連合会長　東京第一）
5・15　第一回放送大学同窓会創立十周年記念行事実行委員会　（岩田委員長）
7・4　福岡同窓会設立総会
10・2、9　十周年記念行事「三国峠三国街道を歩こう会」（群馬同窓会主催）
10・31　十周年記念行事「歴史の陰を歩く」（東京第二同窓会主催）
11・22　同窓会連合会と大学との懇談会

3月　第十一回卒業式　国立教育会館　1786名卒業
4月　神奈川学習センター　新飯田宏所長就任
キャンパス・ネットワーク・システム運用開始
10月　選科履修生　科目履修生の入学年齢要件を15歳に緩和

2000年（平成12年）

1・29　見学会　泉橋酒造
2・11　F・P　タイのソムチャイ君訪問
3・1　会報『波涛』19号発行
5・14　第11回総会　役員改選　第六代会長　伊東廣明
（会員数749名）
F・P　支援チャイルド五名に増員
講演会　神奈川学習センター所長　新飯田　宏教授
「私の見たアメリカン・ライフ」　懇親会
6・4　創立十周年記念行事　「鎌倉散策・花巡り」



1・8　十周年記念行事「新春講演会」下田清美氏
（卒業生）（埼玉同窓会主催）
2・6　栃木同窓会設立総会　（須藤会長）
3・1　創立十周年記念誌発行
3・19　卒業祝賀・謝恩パーティ主催　国立教育会館
4・9　十周年記念行事「私の主張」発表会
（東京第二同窓会主催）
4・16　連合会総会　（二村連合会長）
5・28　十周年記念行事「安孫子散策会」（あしだち会主催）
6・4　十周年記念行事「鎌倉散策・花巡り」（神奈川同窓会主催）
6・10　十周年記念行事「千葉の見所と懇親の旅」（千葉同窓会主催）
6・24　同窓会創立十周年記念祝賀会　学士会館本館
8・1　高橋連合会長に交代

3月　第一二回卒業式　国立教育会館
1932名卒業
5月　神奈川学習センター増築

設立準備委員会	
	平成2年6月 ～2年10月
委員長	§ 別所敏明
副委員長	嶺田勝典 加藤あいし
総務委員会	大貫京子 五十嵐一成 片山洋子 加藤あいし 大塚品子 § 杉本志津子
規約委員会	桂馬正美 須藤威夫 奥村高志 鈴木照子
活動予算委員会	小山佐枝子 桜田幸子 龍造寺寛 § 小山義広
支部総会準備委員会	稲葉恒夫 村上美砂子 松岡和正 嶺田勝典 § 中川英子

支部役員					同窓会役員	
	第1期 平成2年10月 ～4年3月	第2期 平成4年4月 ～6年3月	第3期 平成6年4月 ～8年3月	第4期 平成8年4月 ～10年3月	第5期 平成10年4月 ～12年3月	第6期 平成12年3月 ～14年3月
会長	§ 別所敏明	加藤あいし	稲葉恒夫	押山睦生	∬ 藤井輝	∬ 伊東廣明
副会長	嶺田勝典 加藤あいし	近藤武志 § 稲葉恒夫	§ 龍造寺寛 押山睦生	池永康子 藤井輝	森西節子 伊東廣明	西浦久晏 小山佐枝子
事務局長	五十嵐一成	五十嵐一成	五十嵐一成	田澤誠一	田澤誠一	飯塚佳子
副事務局長	§ 村上美砂子	片山洋子	§ 星礼子	星礼子		
事務局					星礼子 和田正純	片岡久雄 元山由喜夫
会計	龍造寺寛 小山佐枝子	§ 小山佐枝子 坂本春江	坂本春江 池永康子	森木洋子 久保洋子	久保洋子 飯塚佳子	大泉トク 佐藤美津留
総務(規約) 規約	大貫京子 片山洋子 須藤威夫 § 藤田茂光 松岡和正 § 小山義広 § 鈴木照子 桜田幸子	岩間吉男 大塚徳江 大貫京子 倉田スヨ子 松岡和正 南　宏	§ 松岡和正 森西節子 森脇早代子 桑島久乃 田澤誠一 岩間吉男	森西節子 伊東廣明 上原哲雄 片野克己 小山佐枝子 衛藤裕美	伊東廣明 上原哲雄 片野克己 小山佐枝子 金子和子	小山佐枝子 片野克己 金子和子
企画	稲葉恒夫 小川みのり	小川みのり 甕　潤 § 龍造寺寛	上原哲雄 越川敏子 § 糸井アサノ	藤井輝 越川敏子 佐藤芙美子 § 西川隆	森西節子 佐々木順子 出口仁美 西浦久晏	西浦久晏 佐々木順子 出口仁美
監事	奥村高志 市村恭子	奥村高志 那須美津子	那須美津子 南　宏	林カヨ 和田正純	越川敏子 龍造寺寛	∬ 藤井輝 龍造寺寛
選挙管理委員会		池田美智子 別所敏明 宗行紀子	加藤あいし 近藤武志 片山洋子			
フォスター・プラン実行委員会	別所敏明 藤田茂光 稲葉恒夫 片山洋子 五十嵐一成 小川みのり 村上美砂子	加藤あいし 別所敏明 藤田茂光 稲葉恒夫 片山洋子 五十嵐一成 小川みのり 村上美砂子	稲葉恒夫 別所敏明 加藤あいし 片山洋子 五十嵐一成 松岡和正 小川みのり	押山睦生 稲葉恒夫 加藤あいし 片山洋子 五十嵐一成 松岡和正 佃幸子 田澤誠一 星礼子	藤井輝 稲葉恒夫 加藤あいし 片山洋子 五十嵐一成 松岡和正 佃幸子 森西節子 田澤誠一 星礼子 伊東廣明	伊東廣明 藤井輝 稲葉恒夫 加藤あいし 片山洋子 五十嵐一成 松岡和正 佃幸子 森西節子 田澤誠一 星礼子

§は、本部役員兼務。∬は、連合会役員兼務。

編集後記

平成十二年十月二十日、神奈川学習センター同窓会は、創立十周年を迎えます。そこで当同窓会では、恒例の「鎌倉散策」を記念行事と位置づけ、広く他の同窓会にも呼びかけて交流を計ること、記念誌として『波濤』特集号に会員名簿をセットして発行することを決めて準備を進めてまいりました。

発刊に当たって、新飯田センター長をはじめ諸先生方、そして関係者の皆様には、執筆をお願いするなど、多大なご協力を頂き編集委員一同心より感謝申し上げます。

放送大学は平成十年から全国放送を開始しておりますが、当同窓会は既に十年の歴史を歩んで来ました。この間の行事を追いながら、又写真を整理しながら活動を振り返りますと、諸先輩方の同窓会に対する熱き思いが伝わって来ます。先輩から受け継いだ心を少しでも伝えられれば幸いです。

平成十二年八月　（森西節子　記）

創立十周年記念誌『波濤』特集号

発　行　平成十二年九月一日

発行者　放送大学
　　神奈川学習センター同窓会

編　集　創立十周年記念誌編集委員会

編集委員　森　西　節　子（委員長）
　　伊　東　廣　明
　　片　野　克　巳
　　金　子　和　子
　　小　山　佐枝子
　　田　澤　誠　一
　　出　口　仁　美
　　藤　井　輝　礼
　　星　　子

印　刷　鑛吉富印刷